

(有)友悠農場 代表取締役

森島 徹さん

明日へ向かって駆ける

農業法人の経営者は語る

「お米もイチジクも一番おいしくなるときに収穫して皆さんに届けたい。地域特産の花ハスも絶やすことなく栽培を続けていきたい」と話すのは、城陽市奈島地区の「(有)友悠農場」代表取締役の森島徹さん(63)。

同市南部の新名神高速道路と京奈和自動車道が接続し、便利になった城陽インターチェンジ(IC)周辺の水主地区、寺田地区で13畝の農地を預かり、水稲の農作業受託、花ハス1・5畝、イチジク40坪を栽培する。

森島さんは、大学で学んだ植物病理学を仕事に活かそうと営農指導員として地元JAで働いていたが、自らおいしいトマトが作りたい、知識を実践に生かしたいこの思いから45歳でJAを退職。城陽市水気耕栽培センター(国の補助金を受けて市が建設したモデル温室施設(以降、センター)で、妻

が養液栽培組合の一員として働いていたこともあり、退職を機に夫婦で管理を引き受けた。現在もセンターのガラス温室で、年2作養液栽培でトマトを栽培し、日々どうすればおいしいトマトが作れるのか試行錯誤を重ねる。その傍ら、顔見知りの農家から「田んぼの面倒を見てくれないか」と頼まれたのを機に水稲の作業受託を始めた。また、2006年には仲間と共に法人を設立し、高齢化の進む地域農業の受

け皿をつくることで特産品である花ハスの生産を守り続けている。「仲間と共に、友達感覚で長く悠々とやっていきたい」との思いを込めて友悠農場と名付け、法人設立時から約4倍となる面積13畝、120枚の田んぼを預かる。収穫した米は、水田の委託者や地元市民に販売。地域特産物の花ハス3万本を益用に7月末から8月中旬までに収穫し、JAを通して大阪の花き市場に出荷。イチジクはJAの直売所での

直売や菓子製造業者に販売する。

森島さんは「米は価格が安定しているのだから程度計算できるが、花ハスは益に向けて10日間で花として何本出荷できるかにかかってくる。せりの値段も大きく変動するので、市場価格の低下は経営の悪化に直結して経営は厳しい」と課題を話す。

その一方で、「大学の研究にも協力していて、最近ハスの花に美白効果があることが証明されたことから、この研究がうまくいき新たな商品につなげたい」と森島さんは話す。

「これからも預かる農地は増えるかもしれないが、会社だけで頑張るのではなく日頃からの地道な活動が必要。周りには元気なおっちゃん、おばちゃんがいるので、一緒にやっていきたい」と森島さんは地域農業の今後について話す。

■法人所在地 城陽市奈島上ノ段67の11。(電)0774(55)0164。

■法人概要 2006年4月設立。役員3人、正社員3人、アルバイト1人、土日パートタイマー1人、花ハス収穫期パートタイマーのべ350人。経営面積 水稲13畝(ヒノヒカリ)、にこまる、てんこもり、花ハス1・5畝、イチジク40坪。農業機械 トラクター3台、田植え機1台、コンバイン2台、播種機・畔塗り機各1台、米乾燥機2台、保冷庫4台。

仲間と地域農業を守る

▶地域の農業を支える森島さん

